

BARRY v. DEPUY SYNTHES COMPANIES事件、上訴番号 2023-2226および2023-2234 (CAFC、2026年1月20日)。Prost裁判官、Taranto裁判官、Stark裁判官による審理。ペンシルベニア州東部地区地方裁判所(Diamond裁判官)による判決を不服としての上訴。

背景:

Barry医師はDePuy Synthes社(以下、DePuy社)を提訴し、DePuy社が外科医にBarry医師の特許を侵害するよう誘導したと主張した。特に、主張特許は、外科医が椎骨のずれをまとめて調整するのをサポートすることにより脊椎変形を治療するための外科手術技術および器具を対象としている。従って、特許のうちの2件の特許のクレームでは、これらの技術に使用される器具に1つ以上の「ハンドル手段(handle means)」が必要とされている。地方裁判所は、「ハンドル手段(handle means)」とは「特に手で握られるように設計された部品(a part that is designed especially to be grasped by the hand)」であるとし、この用語には単一のハンドルと連結されたハンドルレイの両方が含まれるとした。さらに、この解釈においては、デバイスの「シャフトとハンドル(shaft and handle)」は別個または異なる物体である必要はないとした。

正式事実審理(trial)にて、Barry医師はYassir医師とNeal博士を専門家証人として紹介した。Yassir医師は、被疑器具は、主張クレームのあらゆる限定を満たす方法で組み立てられ使用されることができると証言した。Neal博士は、自身が実施した調査により、少なくとも61万件の侵害手術が行われていたことが明らかになったと証言した。

DePuy社は、Yassir医師の証言が裁判所の「ハンドル手段(handle means)」に関するクレーム解釈と矛盾しており、Neal博士の調査方法と結果は連邦証拠規則(Federal Rules of Evidence)で義務付けられている信頼性の基準を満たしていないと主張した。従って、DePuy社は両専門家の証言の削除を求めた。地方裁判所はDePuy社に有利な判決を下し、さらに侵害がないという法律上での判断を下した。

争点/判決:

地方裁判所がYassir医師とNeal博士の専門家の証言を除外したことは誤りであったか。然り。CAFCは、地方裁判所が専門家の証言を除外したことは裁量権の濫用であるとし、原判決を覆し、差し戻し審理を命じた。

審理内容:

CAFCは、Yassir医師の主張は「ハンドル手段(handle means)」に関する裁判所のクレーム解釈と矛盾しないと判断した。例えば、地方裁判所は、組み立てが必要なDePuy社の器具の構成要素が「ハンドル手段(handle means)」に該当するというYassir医師の主張に異議を唱えた。しかし、CAFCは、これは地方裁判所のクレーム解釈と矛盾しないと判断した。むしろ、CAFCは、Yassir医師が陪審員に対し、裁判所のクレーム解釈がどのようなものであったかを繰り返し述べ、その解釈に基づいて同医師の意見が出されたと判断した。従って、CAFCは、Yassir医師による裁判所のクレーム解釈の適用は、証拠の採用可否ではなく、証拠の重視度に関係すると結論付けた。

CAFCは、Barry医師が証拠の優越性(preponderance of the evidence)によってNeal博士の調査方法に「十分な根拠(good grounds)」があることを立証した時点で、陪審員はNeal博士の証言を聞くことを認められるべきであったと判断した。CAFCは、地方裁判所がNeal博士の方法にて欠陥としたものは、証拠の採用可否ではなく、陪審員がその証拠に与える重視度に影響を及ぼすと再び結論付けた。